

釣れ釣れなるままに

2005年思い出の釣行記 PART. 5

レジャーカード

鹿島釣狂

岩見沢釣遊会第5回大会

☆開催日	平成17年9月4日
☆開催場所	入船港～ケリ舞港
☆入釣場所	元静内川河口→春立4区→駅前→4区
☆釣果	アカハラ 335 mm 1
	カジカ 305 mm 1
	ハゴトコ 3
	重量 1710 g
☆成績	合計点数 811 点
	順位 5 位
	累計点 22 点 (27265)

幸先がよいか

2ヶ月ぶりの大会である。九月に入ったとはいえ、海水温はまだ高く、夏枯れの時期が続いている。この時期に静内方面の釣りは経験したことがなく、どんな釣りものがあるのか皆目見当がつかない。アブラコやカジカはまだ望めそうもなく、アカハラ4本と嫁に1本出ればよいところか。

島氏と前野氏がアカハラをねらって静内川河口右に向かうと言う。静内川は大会範囲に入っておらず、入船漁港から戻ることになり、しかも嫁をとることが難しいらしい。嵐氏、吉井氏、庄司氏が春立漁港で下りてアカハラをとってから周辺の磯を探ると言う。やはり通い慣れた春立が無難なところか。山岸氏、谷口氏が温泉川に向かうと言う。すぐ近くの宇勢内浜は私にとっても魅力的な場所に感じ、以前何度か下見をしたところである。

いくつかの情報を頂き、結局、元静内川橋で降ろしてもらおう。夏枯れの時期を嫌って釣

り大会が開催されていないようで釣り人の姿が全く見えない。23時半、橋の下にある舟揚場の中央に陣取り、アカハラ仕掛けをドボンとやる。



2本目を用意している間にもその竿に快いアタリが出た。35cm級のアカハラがゴロを銜えてあがってきた。アカハラをねらってほんの波打ち際に打ち込んだ竿尻がガクンと持ち上がった。期待には満たなかったが30cm級のカジカがあがった。早々の魚を手にして本日の釣りに希望が膨らむ。しかし、その後はハゴトコが

ポツポツ来るだけで竿を大きく揺らすアタリは出ない。3時の満潮時を迎えて、竿がピクリとも動かなくなった。

温情に甘える

背後に車が停まった。地元の釣り人が、タカノハねらいで春立駅前に行ってみたが、波が高くてここに寄ってみたとのことである。他の場所はどこも寄せ波が高く釣りにならないとも言う。私の少ない経験ではあるが、春立4区の浅い岩盤地帯は、沖に張り出した岩で波が消され海岸縁は釣りになることが予想され、しかも波が高いときにこそ魚が岸寄りしているように思われる。4区に向かうと決め、釣り道具を片付け始めると、向かう先に車で送ってあげると言う。車を汚したり時間を使わせていただくことを考えて固辞したが、熱心に誘ってくれる。お言葉に甘えて春立駅前まで乗せていただいた。バス停で言えば元静内、春立入り口、春立漁港、春立4区、春立駅前の4区間である。キャストで荷物を引いてゴロゴロと歩くことを考えると体力を温存でき、釣りへの集中も高まるというものだ。他人の親切に甘えてしまった。

その御仁の言っていたとおり4区は案の定波が高い。私の予想よりもはるかに波が高い。とても釣りをさせてもらえそうにない。駅前から4区にかけて何度も往復して釣りになりそうなところを探して歩く。

這いずり回るも

防潮堤に上がりライトの灯りを消して夜目で海岸を眺める。何度かの入釣である程度釣り場の状況が頭に入っている。今立っている舟揚場は春立一番の大岩の左に当たる。30分先まではカジカが住みそうなよい青草が茂っているはずだ。すぐ手前に小岩が見え隠れしているがその両脇をねらって遠投すると昆布根に到達する。ネット仕掛けの中投でカケアガリということだろうか。過去にここでアブラコの大物をあげた記憶がよみがえる。本日の波では手を出せそうにもない。その舟揚場から2つ左の舟揚場はプールが一番近くなっているところである。左手前方に小岩が顔を出している。本日の波ではここが無難なところだと考え、そこで荷物を下ろす。しかし、ハゴトコが竿を揺らす大きなアタリはない。干潮に向かっているはずなのにますます波が高くなっていく始末である。

6時、他の釣り場を捜していると、交番前の波が幾分治まっていたのでそこに移動してみる。しかし、いくら打てどもハゴトコが1匹だけきただけでピントもカントも来ない。

7時半、またまた4区方向に移動すると舟揚場の下でも竿を出せるほど潮が引いてきたので、立ち込みでの釣りになるが、釣りを再開する。30m程先のプールのカケアガリをねらって、その先に頭を出す昆布根の周りをねらって打ち込むがハゴトコがうるさいのみで、大物のアタリはついぞ来ないまま締め切り時刻になった。この波ではどこも同じだろう。唯一、漁港に入った仲間がよい思いをしているかもしれないなどと思いながらバスに乗り込む。

バスの中で、コトの顛末を会長に話していると、温情に甘えたこと、つまり車での移動はほんの僅かでも、会の規定で失格だとレッドカードを突き出されてしまった。そんなルールがあったことを露も知らなかった自分の馬鹿さ加減に呆れてしまう。釣遊会に入会して10年を経過しているにも関わらず・・・。

審査結果は、

審査結果			
優勝	安曾和夫	945点 (アブラコ273mm+アカハラ407mm+2650g)	東静内港
準優勝	庄司幸吉	943点 (アブラコ262mm+アカハラ415mm+2660g)	春立漁港
3位	吉井博	894点 (アブラコ265mm+アカハラ398mm+2310g)	春立漁港
4位	阿部重義	870点 (アブラコ223mm+アカハラ402mm+2380g)	三石
5位	大前健治	852点 (アブラコ266mm+アカハラ370mm+2160g)	三石
身長優勝	高橋昭吾	43.3cm (アカハラ)	東静内港

であった。皆、夏枯れの時期と大荒れの海況から港の中でアカハラ狙いに徹し、40cm以上のアカハラ4本にハゴトコを嫁にしていた。静内川組は、やはりアカハラのみで嫁が取れずに涙を呑んだ。

生命の羽根

釣り人にとってのアカハラは、馬鹿にされやすく、無用のものと防潮堤の隅に叩きつけられるのがオチだが、大会になると大いに活躍する。「北海道のつり」誌面でもアカハラの調理法が取り上げられていることに感心させられるが、創造主の前では、存在価値のないものは何一つとしてない。ここでは生きとし生けるものすべて、何憚ることなく精一杯その生命の羽を伸ばしているのだ。

私たちが毎日口にするものはこの地球に宿る命、つまりその命を頂いて生きている。雄大な自然を彩る草木、庭に咲くきれいな花や蔓延る雑草、その草花に集まる蝶や蜂などの虫たち、野山を駆けめぐる獣たち、大空を羽ばたく鳥たち、大海原を泳ぐ魚たち、その命を育むこの地球、更に広く見ていけば、燦々と輝く太陽や天上に瞬く星々、つまりは宇宙それ自体が生命であり、その生命が様々に形を変えて存在しているのだ。しかも、一切が

切り離して考えることができない存在として調和し合い繋がっている。

私も釣りを愛好する者の端くれとして「その命の輪廻に楔^{くさび}を打ち込むことになってはいないか」と自問しながらこの海原と付き合いがなければならぬと考えている。